

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01060

研究課題名(和文) ペルシア戦争の遺産に関する通時的総合的研究

研究課題名(英文) Diachronic Studies on the Legacies of the Persian Wars

研究代表者

師尾 晶子 (Moroo, Akiko)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：10296329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、ペルシア戦争の体験と記憶が、長期にわたってどのように継承されたかについて考察した。古代ギリシア世界において、ペルシア戦争の記憶はどのようなレベルで共通の文化的記憶として定着したのか。アテナイにおける記憶の継承と創造の諸相を明らかにするとともに、アテナイの言説が、時間を経て他のポリスに及ぼす影響をあたえたかについて焦点を当てて考察をおこなった。とりわけ、ヘレニズム時代以降の時代におけるペルシア戦争に直接的・間接的に言及したモニュメントや儀礼に着目し、その設置の背景および意図について検討することから、個別のポリスにおける記憶と「ギリシア人」の記憶とのせめぎ合いについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、まず第一にアテナイにおけるペルシア戦争にまつわる言説が、ヘレニズム時代以降他のポリスへも波及していった可能性のあることを明らかにしたこと、第二にアテナイおよびスパルタ以外のポリスにおいて、アテナイの言説を利用しつつ記憶が組み立てられ、「ギリシア的なもの」としてのペルシア戦争の記憶が生成されてきたことを示したことだと言える。

社会的意義としては、歴史上、戦争の勝者の記憶が一方向的に継承されることから、それがやがて定説とされ、さらなる硬直したイデオロギーの創出につながっていく過程を示したことである。現代における戦争の記憶の継承を考える上でも参考になるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research project investigated the temporal process by which experiences and memories of the Persian Wars were inherited and established as a shared cultural memory over the long term. It examined various aspects of memory inheritance and creation in Athens, focusing on how Athenian discourse influenced other city-states over time. Notably, it analyzed monuments and rituals that directly or indirectly referenced the Persian Wars during the Hellenistic period and beyond, examining the background and intentions behind their installation. This investigation explored the interplay between memory within individual city-states and the broader "Greek" memory.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：ペルシア戦争 文化的記憶 集合的記憶 記憶の場 ローカルアイデンティティ 歴史叙述 古代ギリシア

1. 研究開始当初の背景

2020年は前480年のテルモピュライの戦い、サラミスの戦いから2500年の記念すべき年に当たることから、ギリシア共和国においては政府主導の記念行事が計画されていた。そのキックオフミーティングにおいて、ミツオタキス首相は、ペルシア戦争を「ギリシアの、そして全世界の民主主義と自由を守った戦い」と位置づけた演説をおこなった。このような見方が啓蒙主義時代以来の伝統的な見方であることは、少なくとも専門家の間では、今日広く認識されている。その一方、今なお、このような見方を前提にペルシア戦争の総論が、あるいは各論を展開した研究が専門家によっても刊行されている。一般社会における通俗的な認識と、研究者による通俗的認識を取り込んだ語りとが相互に強化し合うことで、「民主主義と自由を守った戦い」というペルシア戦争の位置づけが自明のものとなされ、結果として無批判に受容されてきた。近代西欧における東洋と西洋の差異をめぐる言説において取り上げられたペルシア戦争のイメージが、逆に古代における他者イメージに投影されることで、古代におけるペルシア戦争の記憶とその受容をめぐる議論が単純化されてしまうという事態も生じた。

西欧の学問的伝統の影響を大きく受けた環境にはあるとは言え、西欧からは距離的にも歴史的にも大きく離れた日本から、古代の史料をその史料がつけられた時代に即して検討することから、古代ギリシア世界におけるペルシア戦争の記憶の継承の歴史をあらためて描きたいと考えたのが、本研究に着手するきっかけであった。

2. 研究の目的

本研究は、上記のようなペルシア戦争の研究史そのものが内包する問題を問い、古代ギリシア世界におけるペルシア戦争に関わる種々の史料、記念碑について、それらがつくられた時期と背景に注目することから、記憶の継承のあり方を検討することを目的とする。

ペルシア戦争に関する膨大な研究史は、時にペルシア戦争直後に制作されたモニュメントと数百年の時を経て制作されたモニュメントを同じように取り扱い、論じてきた研究を取り込みながら展開されてきた。長い研究史の中でつくられたイメージが一人歩きすることで、「民主主義と自由を守った戦い」という前提のもとに研究が蓄積されてきたわけである。本研究においては、モニュメントの同時代性、また古いモニュメントや言説に対する後世の受容と評価について、史料およびモニュメントの制作された時代に注意を払いつつ厳密に読み解くことから、ペルシア戦争の記憶の継承の歴史を再構成することを試みる。同時に、近年注目されているポリス間における記憶の競合の問題にも着目し、ペルシア戦争に関わった各ポリスの記憶と後世に伝えられたペルシア戦争の記憶との差異にも注目し、ペルシア戦争の記憶の継承のあり方を描き直すことを目的とする。

3. 研究の方法

ペルシア戦争の戦いにおいて、ペルシア軍に対峙したポリスの多くは、ペルシア戦争後、戦争の記憶を記念するモニュメントを建立・奉納した。戦後まもなく制作されたモニュメントがある一方、数百年の時を経て新たに制作されたモニュメント、新たにつくられた祭儀もあった。モニュメントの建立の時期および祭儀の創設の時期とその背景を検討することから、ペルシア戦争の記憶が当該ポリスにおいてどのように共有されるにいたったかを解明することを試みた。本研究期間においては、アテナイ、トロイゼン、プラタイア、メガラについて個別の検討をおこなった。関連モニュメント、とくに碑文を実見するために、2022年度および2023年度の二回にわたり、現地調査、および現地博物館調査をおこなった。また、これらのモニュメントと祭儀との関係についての検討をおこなった。とくにアテナイについては、エフェベアとペルシア戦争の記憶との関係について検討した。また、後代の戦没者あるいは兵士の墓碑において、ペルシア戦争の兵士のイメージがどれほど投影されているかについての検討をおこなうことから、ペルシア戦争のイメージが社会にどのように浸透していたかについて再検討することを試みた。

4. 研究成果

本研究課題は、2020年4月から2023年3月にかけておこなわれた。新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の影響で、2020年度および2021年度に予定されていた国際学会、ワークショップの一部は中止となり、一部は延期、あるいはオンライン開催となった。とくに、2020年初夏に予定されていたギリシア国立劇場によるアイスキュロスの『ペルシア人』の上演を通じて、ギリシアと日本における他者へのまなざしの解釈の異同を議論し、ペルシア戦争を舞台とする演劇の位置づけを議論するというワークショップの開催は、完全に時機を逸し、実現することができなかった(2019年11月におけるギリシア国立劇場とのワークショップの開催合意については、<https://www.n-t.gr/el/news?nid=33479>を参照)。ペルシア戦争の戦地および記念碑奉納の場の調査を中心とする現地調査の再開も2022年9月まで待つこととなった。

本研究課題に深く関わる個別の研究成果については、以下の研究会および学会で発表している。また公刊された雑誌論文および論文集の中に掲載された論文についてもここに記す。口頭報

告については、それぞれ論文の形で発表する準備を進めている。

(1) 2020年9月 2020年度西洋古代史セミナー(オンライン) 「ペルシア戦争の記憶と《ヘレネス》意識の創造と展開」

ペルシア戦争の記憶が、アレクサンドロス以後にいかにかステレオタイプ化されるにいたったか、前4世紀までのアッティカ弁論における「アテナイ人」のペルシア戦争という言説から「ギリシア人」のペルシア戦争という言説への転換がどのようにおこなわれてきたかについて考察した。

(2) 2021年3月 科研費合同研究会(19K23112, 20K01060) (オンライン) 「《歴史家》の顕彰とポリスの歴史の創造—競合とネットワーク」

ヘレニズム時代からローマ時代にかけて、ポリスの歴史を披露した「歴史家」がしばしば顕彰された。現存史料から見る限り、前3世紀から前2世紀に事例が集中している。「歴史家」の活動は、各地におけるポリス史の創造にいかなる影響をあたえたのか、「歴史家」ははたしてアウトサイダーなのか、それとも包摂された存在なのかについて考察し、彼らが紡いだローカル・ヒストリーがギリシア人のネットワークの形成にあたえた影響について考察した。

(3) 2021年3月 「古代ギリシアにおける若者教育とスポーツ-実態とその神話化」『国府台経済研究』31-1 (2021) 9-31 ページ

前4世紀後半におそらく制度化されたエフェベイアによる若者の集団教育のもつ意味について考察をおこなった。この研究が、以後のエフェベイアと記憶の継承にかかわる研究へとつながっている。

(4) 2021年9月 Sino-Hellenic Academic Project 2nd International Conference on Global Issues of Environment & Culture (オンライン) “Keeping the Sacred Landscape Beautiful and Elaborate: Maintenance of Sanctuaries in Ancient Greece”

記憶の継承の場として中心的かつ重要な役割を果たした古代ギリシアの聖域の景観が、どのように維持されてきたかについて考察した。この報告を元に同名の論文が *Journal of Ancient History and Archaeology* 9 (2022) 105-110 に掲載された。

(5) 2021年10月 The 12th Korea-China-Japan Symposium on Ancient European History (オンライン) “The Memory of the Persian Wars and Its Use for the Creation of the Collective ‘Greek’ Identity”

当初の2020年10月開催予定から1年延期された上でオンライン開催となった国際シンポジウムでの報告。ペルシア戦争をめぐる言説が、前4世紀後半からヘレニズム時代の間にそれぞれのポリスにおける集合的記憶として、ついでギリシア人に共有される集合的記憶として、どのような経過をたどって定着してきたか、またそうした集合的な記憶がその時々の政治外交において利用されたかについて論じた。

(6) 2022年6月 「記憶の継承の場としてのエフェベイア」周藤芳幸編『古代地中海世界と文化的記憶』山川出版社、260-285 ページ

アテナイの若者教育の場となったエフェベイアにおいて、過去の記憶、とりわけ過去におけるペルシア戦争の功績の記憶が継承されていった過程を示すとともに、かかる記憶が古典期よりもむしろ戦後200年以上も経たヘレニズム時代以降に強化されていった背景について考察した。

(7) 2022年11月 Epigraphy Workshop (千葉商科大学付属図書館井出毅セミナールーム) “Two Stelai from Acharnai Revisited: SEG 21.519 and RO 88”

上記(6)で取り上げたアカルナイ出土の二枚の石碑 (SEG 21.519 《デーモス決議》およびRO 88 《ディオンの奉納碑》) は、現在、在アテネフランス研究所の所長のレジデンスの入り口の壁に展示されている。2022年9月、現地にて写真を入手し、不十分ながらあらためて検討する機会を得た。本報告ではSEG 21.519に焦点を当て、2枚の碑文の関係と建立の背景について、前稿での議論に若干の修正と補遺を試みた。とくにアレソおよびアテナ・アレイアの神域整備の時期と背景について、またアカルナイとアレソ祭祀との関係、決議に見られるアカルナイとポリスとの関係について考察した。

(8) 2022年11月 2022年度古代ギリシア文化研究所秋季研究集会 「アカルナイのデーモス決議とディオンの奉納碑—SEG 21.519とRO 88」

上記(7)について、内容を拡大して日本語で報告したもの。

(9) 2023年2月 One-Day International Workshop: Diving into Asia Minor: Multiple Sources for the Hellenistic and Imperial Greek World (京都大学楽友会館) “Tombs for All to See: Mortuary Landscape and the Local Identity in the Hellenistic and Roman Lycia”

集合墓が町中から見えるというリキア墓の特徴、とりわけクサントスにおいて王朝時代のモニュメンタルな墓のいくつかがヘレニズム時代以降の都市形成において若干の場所の移動をともしないつつ、都市の中心部に配置され、都市のシンボルとして機能することになったことと都市

アイデンティティの表現の特徴について報告、考察をおこなった。都市景観の構成が記憶の継承にどのような影響をもたらしたかについて考察した。

(10) 2023年3月 科研費合同研究会(オンライン)「IG VII 53とメガラにおけるペルシア戦争の記憶の継承」

ペルシア戦争からおよそ800~900年後、ギリシア側の同盟国の一員として参戦したメガラにおいて、ペルシア戦争の戦没者を追悼する記念碑が再刻・再建された。再建事業は、メガラのおそらくアポロン神殿の神官ヘラディオスによっておこなわれ、碑はもともと設置されていたと思われる市の中心部に建立された。この碑を出発点として、ギリシア世界において、ペルシア戦争から時間が経ってから記念碑が建立され、記念祭典が創設される意味と背景について考察した。

(11) 2023年8月 2023年度第2回パルテノン科研研究会(オンライン)「トロパイオンからトロパイオンへ：ペルシア戦争記念モニュメントの建立と記憶の強制／矯正／共生」

ペルシア戦争関連の戦争記念碑のうち、とくにトロパイオンと呼ばれる勝利記念碑の意味について再考した。また、半永続的な勝利記念碑が建立されるようになった背景についての議論の整理をおこなった。

(12) 2023年12月 International Workshop: The Afterlife of the Greco-Persian Wars: From Antiquity to Modern Times (京都大学楽友会館) “Reimaging the Past: Athenian Ephebeia’s Role in Shaping the Perception of the Persian Wars”

ペルシア戦争の記憶がアテナイ市民の間にどのように継承されていったか、前330年代に確立されたエフェベΙΑ制度に焦点を当てて考察した。とくに、前4世紀末以降、マケドニアの支配のもとで翻弄されたエフェベΙΑ制度が、前229年のマケドニアからの解放とともに、どのようにアテナイの過去の栄光の歴史を継承するシステムとして機能し得たかについて論じた。さらに、前2世紀以降、ローマほか外国人のエリートの子息がアテナイのエフェベΙΑに参加することによって、かかる記憶がアテナイ人のみならず、アテナイを超えて継承・共有されていった可能性について論じた。

(13) 2024年3月 The Fifth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World (National Hellenic Research Foundation, Athens) “Troezenian Memories on the Greco-Persian Wars: Revisiting the Themistocles Decree through the Troezenian Perspective”

前480年にテμισトクレスが建議したと伝えられるいわゆる「テμισトクレスの決議」について、前3世紀にトロイゼンのアゴラに建立された背景について考察した。建立された時期のトロイゼンを取り巻く状況の中に決議の建立の意図を位置づけることを試みるとともに、前3世紀にペルシア戦争に関する集合的な記憶が再構築された過程についても考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 師尾 晶子	4. 巻 156
2. 論文標題 アンティオキアを襲った地震の記録	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 かいほう	6. 最初と最後の頁 3, 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 師尾 晶子	4. 巻 84
2. 論文標題 エーゲ海を往来したフェニキア人：シドンの商人の活動を中心に（古代地中海世界における人々の移動とネットワーク(2)：Identity, Ethnicity, Acculturation）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 109～128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/0002000377	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 師尾 晶子	4. 巻 69
2. 論文標題 書評：Rosalind Thomas, Polis Histories, Collective Memories and the Greek World. Cambridge UP 2019	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 147-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 師尾 晶子	4. 巻 59
2. 論文標題 書評：岸本廣大『古代ギリシアの連邦：ポリスを超えた共同体』京都大学学術出版会、2021年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 MOROO, Akiko	4. 巻 9
2. 論文標題 Keeping the Sacred Landscape Beautiful and Elaborate: Maintenance of Sanctuaries in Ancient Greece	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Ancient History and Archaeology	6. 最初と最後の頁 105-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14795/j.v9i1.713	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 師尾 晶子	4. 巻 -
2. 論文標題 「パルテノン」とアテナ女神聖財財務官の聖財記録をめぐる覚え書き: ファン・ロークハイゼン (J. van Rookhuijzen) の研究をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 パルテノン彫刻研究: オリент美術を背景とする再解釈の構築	6. 最初と最後の頁 88-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 師尾晶子	4. 巻 997
2. 論文標題 時評 極右政党「黄金の夜明け」の台頭と極左連合政権下のギリシアにおける古典教育と古代史の再定義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 師尾晶子	4. 巻 429
2. 論文標題 松明競走	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地中海学会月報	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 師尾晶子	4. 巻 31-1
2. 論文標題 古代ギリシアにおける若者教育とスポーツ-実態とその神話化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国府台経済研究	6. 最初と最後の頁 9-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 聖域の食べ物・飲み物 古代ギリシアの場合
3. 学会等名 第47回地中海学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 トロパイオンからトロパイオンへ：ペルシア戦争記念モニュメントの建立と記憶の強制 / 矯正 / 共生
3. 学会等名 2023年度第2回パルテノン科研研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko MOROO
2. 発表標題 Reimagining the Past: Athenian Ephebeia's Role in Shaping the Perception of the Persian Wars
3. 学会等名 International Workshop: The Afterlife of the Greco-Persian Wars: From Antiquity to Modern Times (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko MOROO
2. 発表標題 Troezenian Memories on the Greco-Persian Wars: Revisiting the Themistocles Decree through the Troezenian Perspective
3. 学会等名 The 5th Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 「バルテノン」とアテナ女神聖財財務官の聖財記録をめぐる覚え書きーファン・ロークハイゼン (J. van Rookhuijzen) の研究をめぐって
3. 学会等名 2022年度バルテノン科研第1回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 MOROO Akiko
2. 発表標題 Two Stelai from Acharnai Revisited: SEG 21.519 and R0 88
3. 学会等名 Epigraphy Workshop (千葉商科大学附属図書館) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 アカルナイのデーモス決議とディオンの奉納碑 SEG 21.519とR0 88
3. 学会等名 2022年度古代ギリシア文化研究所秋季研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 MOROO Akiko
2. 発表標題 Tombs for All to See: Mortuary Landscape and the Local Identity in the Hellenistic and Roman Lycia
3. 学会等名 One-Day International Workshop: Diving into Asia Minor: Multiple Sources for the Hellenistic and Imperial Greek World (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 IG VII 53とメガラにおけるペルシア戦争の記憶の継承
3. 学会等名 科研費合同研究会「歴史叙述の場と記憶」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 MOROO, Akiko
2. 発表標題 Keeping the Sacred Landscape Beautiful and Elaborate: Maintenance of Sanctuaries in Ancient Greece
3. 学会等名 Sino-Hellenic Academic Project 2nd International Conference on Global Issues of Environment & Culture (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MOROO, Akiko
2. 発表標題 The Memory of the Persian Wars and Its Use for the Creation of the Collective "Greek" Identity
3. 学会等名 The 12th Korea-China-Japan Symposium on Ancient European History (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 ペルシア戦争の記憶と《ヘレネス》意識の創造と展開
3. 学会等名 2020年西洋古代史セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 師尾 晶子
2. 発表標題 「歴史家」の顕彰とポリスの歴史の創造 競合とネットワーク
3. 学会等名 合同科研研究会 (19K23112、20K01060)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 周藤 芳幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 464
3. 書名 古代地中海世界と文化的記憶	

1. 著者名 長谷川 岳男	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 はじめて学ぶ西洋古代史	

1. 著者名 SUTO, Yoshiyuki ed.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Phoibos	5. 総ページ数 295
3. 書名 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World	

1. 著者名 金澤 周作、藤井 崇、青谷 秀紀、古谷 大輔、坂本 優一郎、小野沢 透、師尾 晶子ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 論点・西洋史学	

1. 著者名 Taner Korkut/ Satoshi Urano (eds.) Akiko Moroo, Yuichi Taki, Tijen Yucel et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 AKMED, Koc University, Istanbul	5. 総ページ数 354
3. 書名 The City Basilica in Tlos	

1. 著者名 神崎 忠昭、長谷部 史彦、師尾 晶子ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 332
3. 書名 地中海圏都市の活力と変貌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 International Workshop: The Afterlife of the Greco-Persian Wars: From Antiquity to Modern Times	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 The 5th Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 Epigraphy Workshop (Chiba University of Commerce)	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------